2025年度大学入試に向けた進路指導のポイント

大学入試に向けた指導・支援におけるターニング・ポイントとも言える「3年生0学期」を迎えるにあたり、教師はどのような準備をすればよいのか。また、25年度大学入試に向き合うことを通じて、生徒にはどんな成長を遂げることが望まれるのか。進路指導を長年担当してきた3人の教師に話を聞いた。

福井県立若狭高校
キャリアサポートセンター（＊）室長
小坂康之
同校に赴任して10年目。水産科。
学校概要は 16 ページ

北海道札幌北高校
進路指導部長
高桑知哉
同校に赴任して3年目。理科（化学、物理）。
学校概要は 16 ページ

奈良県・私立西大和学園中学校・高校
高校1年生担任
梨子田 喬
同校に赴任して1年目。地歴公民科（世界史）。
学校概要は 17 ページ

25年度大学入試に向けた取り組みと必要な視点

どの教科においても読解力がますます重要に

——25年度入試に向けた指導や支援において、今後どのような視点が必要でしょうか。

梨子田　大学入学共通テストの試作問題からも見て取れるように、大学入試はコンピテンシー・ベースに変わりつつあります。一方、毎年度、大学入学共通テスト後には、「覚えた内容を出してほしい」「（世界史なのに問題文が長くて）これでは現代文の問題ではないか」といった受験生のつぶやきがSNS上で散見されます。そうした不満が上がるのは、学校現場の授業がコンテンツの習得に偏っているからではないでしょうか。25年度入試に向けても、その差を埋めることが求められ、教師も生徒もコンテンツ・ベースの授業観から脱却すべきだと思っています。

高桑　その通りだと思います。特に大学入学共通テストが難化している中、あらゆる教科・科目において読解力が求められていると感じます。授業などで生徒同士で議論する場を設けて、思考力や表現力とともに、知識を再構築する力を鍛えることも必要だと思います。

梨子田　読解力と知識の再構築力を鍛えるには、改めて読書が注目されるべきでしょう。例えば、探究学習の過程で、あるいは志望理由書の作成準備の中で、生徒に「〇〇とは何か」「〇〇は

＊ 生涯にわたる学習観や職業観を身につけることを支援するという意味で、いわゆる進路指導部を「キャリアサポートセンター」としている。

25年度大学入試に向けた指導・支援のポイント

25年度大学入試に向けた取り組みと必要な視点

- コンピテンシー・ベースの大学入試に対応する意識変革
- 目的意識を持った読書活動により、読解力や知識の再構築力の向上を図る
- 『情報Ⅰ』の必要性を、教師・生徒に共有する

3年生0学期以降の指導・支援のポイント

- 志望理由書の作成指導を開始し、志望校への思いを確かなものにさせる
- 志望分野を決定していくことで、受験校の選択肢を広げる
- 種々のデータに基づいて、生徒が持っている資質・能力を多面的に把握する
- 学年団で伸ばしたい力を共有し、その育成に教科横断で取り組む

25年度大学入試に向けた学習や進路選択を通して身につけてほしいこと

- 主体的な進路選択を通じて育まれる、自分の人生を切り拓く力
- 自分の学力を客観的に把握し、粘り強く自己調整する力

なぜか」等の目的意識を持って書籍を読ませ、その内容をアウトプットさせるなど、新学習指導要領の文脈で指導することが大切です。

小坂　やはり日々の授業が重要であり、授業をコンピテンシー・ベースにするためには、組織的に授業力を高める工夫が必要です。本校は授業研究会や互見授業を行い、指導のノウハウを学び合っています。その過程での、生徒にどのような資質・能力を身につけさせたいかなどを教師間で語り合うことが、目標の共有と、指導の方向性をそろえることにつながっています。

『情報Ⅰ』を自分事として生徒が学べるように

―大学入学共通テストに向けた指導や支援はどのように考えていますか。

梨子田　『情報Ⅰ』がポイントの1つになると考えています。私は元公立高校教師で、昨年度は県教育委員会に在籍していました。公立・私立・行政・都市部・地方部と様々な立場で学校現場を見てきましたが、地域によって情報科教師の配置に差があり、学校間で指導の差が生じていると思いました。

小坂　福井県では、現職の教師に情報の教員免許を取得させる方針を採っています。また本校では、保護者の不安を解消するため、『情報Ⅰ』を含めた入試全般の指導方針を保護者会で説明するなど、情報共有に努めています。

高桑　本校では、志望者数の多い北海道大学が、大学入学共通テストの『情報Ⅰ』の受験は課すが、配点はしない方針としたため、生徒の『情報Ⅰ』に対する学習意欲への影響を懸念しています。『情報Ⅰ』は、AIやデータサイエンスに関連する科目であり、文理にかかわらず必要な科目です。「大学や社会で役に立つ学びだから頑張ろう」と言って、生徒への動機づけを図っています。また、第1志望が北海道大学でも、大学入学共通テストの結果次第で他大学に出願する可能性もあります。その点でも対策は必須とし、3年次の夏季休業中に「情報Ⅰ」の講習を行う予定です。

梨子田　受験期に「情報が必要だから勉強しなさい」といきなり言っても、生徒には響かないでしょう。1・2年次の『情報Ⅰ』の授業で、自分の生活に根差したことを学ぶ科目だと実感し、自分事として捉えられるようにすることが大切です。生徒が「せっかく学んできたのだから、受験科目としても上手に活用しよう」と思えるような流れを3年生0学期までにつくれればよいのではないかと思っています。

『情報Ⅰ』は大学や社会で必要な力をつける科目として、教科と連携して指導しています。

高桑

北海道札幌北高校

◎設立　1902（明治35）年　◎形態　全日制／普通科／共学　◎生徒数　1学年約320人
◎2022年度卒業生進路実績　国公立大は、旭川医科大、小樽商科大、北海道教育大、北海道大、東北大、千葉大、東京工業大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、公立千歳科学技術大、札幌医科大などに224人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ238人が合格。

3年生0学期以降の指導・支援のポイント

志望理由書の作成を通じて、選抜方法の適性を見取る

―3年生0学期以降は、どのような進路指導が求められるでしょうか。

小坂　本校では2年次後半までに、大学で学びたい研究分野を決めるよう、指導しています。学びたい研究分野という視点で進路を考えれば、受験校の選択肢は広がりますし、第1志望校でなくても、入学した大学で志望分野が学べれば、満足度の高い大学生活を送れるでしょう。反対に、難易度だけで志望校を決めてしまうと、つらい状況に直面した時に、安易に志望校を変更しがちです。「探究学習ではどの分野に興味を持った？」「○○を頑張っていたね」などと生徒と対話し、生徒が自ら適性や関心を見いだせる支援を心がけています。

3年生0学期は、志望理由書の作成指導を始めるよいタイミングだと思います。志望理由書の作成を通じて、自分が何を、なぜ学びたいのかを整理することは、志望校への思いを確かなものとすることにもつながるでしょう。そこで小論文の指導も行えば、自分が総合型選抜と一般選抜のどちらに向いているのか、生徒が自ら気づくはずです。

梨子田　私は、総合型選抜と一般選抜は「一筋」にあると、生徒や保護者に伝えてきました。総合型選抜でも知識・技能をおろそかにしたら太刀打ちできませんし、一般選抜でも思考力・判断力・表現力が求められるからです。3年生0学期の指導としては、例えば、「関連づける力」など、生徒に身につけさせたい資質・能力を1つ設定し、その育成を学年団・全教科で取り組むといった指導をお勧めします。教科横断で行えば、生徒の資質・能力の学年全体での底上げにつながります。

様々なデータを活用して多面的に生徒を把握する

―総合型選抜の募集枠が年々拡大しています。進路指導に変化はありますか。

小坂　本校は、生徒間の学力差が大きいため、一人ひとりの適性や志望を踏まえた指導が欠かせません。その際に活用するのがデータです。若手教師も含めた学年団全員で、模擬試験の結果

自分が主体的になれる「動詞」を見つけることは、何事も諦めずに、道を切り拓く力につながると考えます。

小坂

福井県立若狭高校

◎設立　1894（明治27）年　◎形態　全日制・定時制／普通科、文理探究科、海洋科学科／共学　◎生徒数（全日制）　1学年約270人　◎2022年度卒業生進路実績（全日制）　国公立大は、北海道大、筑波大、横浜国立大、富山大、金沢大、福井大、京都大、大阪教育大、大阪大、神戸大、奈良教育大、和歌山大、鳥取大、徳島大、香川大、愛媛大などに81人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ305人が合格。

進路選択と入試の壁を乗り越える経験を通じて、
自分の人生をハンドリングできる力を身につけてほしい。

梨子田

奈良県・私立西大和学園中学校・高校

◎設立　1986（昭和61）年　◎形態　全日制／普通科／共学　◎生徒数　1学年約340人
◎2022年度卒業生進路実績　国公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに170人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ180人が合格。

や志望校の出題傾向など、様々なデータを分析し、生徒が持っている資質・能力を基に、総合型選抜と一般選抜のどちらを勧めるかを検討します。

高桑　本校も、「校内実力模試」と外部の模擬試験のデータを用いて志望校検討会を行っています。これまで蓄積されてきたデータを基に、生徒一人ひとりについて、適性のある選抜方式や合格可能性、支援内容を各学年で検討し、それらを活用して3年次の進路支援を行います。また、2年次に、東京大学・京都大学志望者と医学科志望者でそれぞれチームを結成し、勉強会等を通じて最後まで諦めない意志を醸成しています。

小坂　本校が重視しているのは2年次2月の模擬試験の結果です。それを基に入試本番までの学力の伸びを推測し、総合型選抜や学校推薦型選抜を視野に入れるかを検討します。そして科目担当者による会議では、各科目担当者・担任・キャリアサポートセンター・教務部が、各学年での学習状況や模擬試験の結果、志望校を共有し、生徒への声かけの内容も相談します。

生徒の志望校を検討するのは大変ですが、2年次の後半に今後の指導の見通しを立て、それを生徒と共有しておくことで、3年次の指導・支援をスムーズに進めることができています。

25年度大学入試に向けた学習や進路選択を通して身につけてほしいこと

進路選択を通じて育みたい、自分の人生を切り拓く力

――大学入試は、生徒が成長する重要な機会でもあります。どのような力を身につけてほしいと考えていますか。

小坂　本校では、「自分が主体的になれる『動詞』を見つけよう」と、生徒に呼びかけています。例えば、「私は○○をしている時に心が動かされる」「○○している時が充実している」といった動詞です。多くの人と出会い、対話する中で、自分が価値を感じることを見つけ、その実現に向けて壁を乗り越え、努力を重ねる。そうした経験を通じて、何事も諦めずに、道を切り拓く力をつけてほしいと願っています。

梨子田　やや抽象的になりますが、生徒には主体的に進路選択ができる力を身につけてほしいと思っています。それが自分の人生を自分でハンドリングしようとする姿勢につながると考えるからです。生徒が主体的に進路選択をするためには、大学入試の前段階として、生徒主体で行う特別活動が鍵になると考えています。本校の生徒は学校行事に熱心に取り組み、運営も生徒が行います。そこで培われた情熱や集団の力が大学入試に向けられ、進学実績を上げています。そうした学びの基盤づくりは、集団で学ぶ学校だからこそできることであり、学校の価値だと思うのです。

高桑　本校の生徒も学校行事に全力で取り組み、特に学校祭への熱意はこちらが驚くほどです。達成感や感動体験、時には生徒同士の衝突も含めて、総合的な人間力の醸成につながっています。それは大学入試だけでなく、大学や社会において生きる力だと思います。

小坂　授業や特別活動などに加えて、評価も生徒主体で行うことが重要ではないでしょうか。自己評価を通じて自己分析能力やメタ認知能力が高まれば、模擬試験の振り返りなども、生徒自身が的確に行えるようになるでしょう。合格可能性の判定を見て一喜一憂するのではなく、自分はどこができていて、どこが足りないのかを客観的に把握し、粘り強く自己調整していく力も、大学入試に向けた学習の中で育めます。25年度入試もそうした指導・支援の機会にしていきたいと思います。